ルクセンブルクを知るための 50 章

田原憲和・木戸紗織　編著

若林恵（評）

ヨーロッパにルクセンブルクという国があることは誰もが知っているし、あるいはシェンゲン協定のシェンゲンはルクセンブルクの地名だと思い当たることはあるかもしれない。しかしベネルクスとしてベルギーやオランダと一緒に扱われることが多いルクセンブルクの実像を知る人は少ないのではないだろうか。本書は、神奈川県より少し大きい程度の面積で人口 60 万 2000 人ほどというこの小さな大公国について、バランスよく知識が得られる良書である。

全体は 8 つの領域に分けられ、50 の章と 13 のコラムから構成されている : I「ルクセンブルクとは」（第 1 章〜第 2 章）　II「多言語社会としてのルクセンブルク」（第 3 章〜11 章）　III「歴史」（第 12 章〜第 18 章）　IV 「政治と経済」（第 19 章〜第 26 章）　V「国際社会の中のルクセンブルク」（第 27 章〜第 28 章）VI「社会と暮らし」（第 29 章〜第 37 章）　VII「文化と芸術」（第 38 章〜第 43 章）　VIII 「都市」（第 44 章〜第 50 章）　構成上特徴的なのは、国の成立ちとしての歴史よりも言語状況が優先的かつ詳細に紹介されている点であり、ここには多言語状況にこそルクセンブルクの本質があるという、執筆者たちの認識が現れているのではないだろうか。

誰もがルクセンブルク語・ドイツ語・フランス語の 3 言語を用い、言語の境界線のないルクセンブルクの言語状況は、同じく多言語国であるベルギーやスイスと比べても特殊であるようだが、とくに現在フランス語圏がないにもかかわらずフランス語が公的言語として重視されていること、またルクセンブルク人の姓名には、名がフランス語系で姓がドイツ語系という人が多いという現象も、隣接する国々との関係が反映されているようで興味深い。移民の多さも更なる言語の多様性の要因とのことで、全人口の半数近くが外国人、さらに首都ルクセンブルク市にいたっては、外国人の比率が約 70%にもなるという。

VI「社会と暮らし」では教育の他、ルクセンブルク語の聖書・安楽死法・自転車レース・チョコレート・ワイン・陶器など身近なテーマが扱われ、興味を惹かれる人も多いだろう。また第 40 章「ルクセンブルク語による児童文学」では、異文化の存在を当然のものとして描いた作品や、難民を生み出す戦争の愚かさをテーマとした作品が紹介されている。ここには難民を多く受け入れている社会状況が反映されており、児童文学の質の高さが窺い知れる。

その他、オランダやベルギーとの深い関わり、国際社会における立場や経済システムなども含め、幅広い視点からルクセンブルクを紹介している本書を読めば、この小さな国の多様な側面が相互に深く関連しあっていることを読者は実感できるだろう。

『ルクセンブルクを知るための 50 章』（2018 年）
田原憲和・木戸紗織編著
明石書店　本体価格 2000 円

「神話」を近現代に問う

植朗子・南郷晃子・清川祥恵　編

小池利彦（評）

本書は、三人の研究者を中心にした「近代神話」プロジェクトを母体として編まれた論文集である。まずは、なぜ「近（現）代」なのか、またそもそも「神話」とは何かという基本的な事柄を確認しておきたい。編者の一人である清川祥恵の総論によれば、「近代」において、「『我々』のための『特別な物語』として、『神話』は人々同士の紐帯および過去からの脈道を『創造』する目的で、利用されるようになった」という。この歴史認識にしたがい、「神話」は「人々によって特別な意味を持つものとして語り継がれる物語」として定義される。

総論以降、グリム兄弟における「神話素」の剔出という興味深いテーマをはじめ、20 篇近くにのぼる古今東西の「神話」に関する論文が並ぶ姿は、壮観といってよい。ただし、個々の論文への言及は、紙幅の都合がそれを許さない（清川の簡にして要を得たまとめを参照されたい）。ここで指摘すべきことがあるとすれば、時代も地域も異なる様々な「神話」の世界が存在するという事実である。それは端的に、我々のこの世界は「別様でもありえた」ということの証明でもある。

この世界が別の姿でありえたとしたら、いま我々が生きている世界は、偶然的なものである。この偶然性を徹底して思考した哲学者に、九鬼周造がいる。九鬼によれば、運命とは人間の意志の外に与えられた偶然である。だが、同時に「運命とは偶然の内面化である」（『人間と実存』）とも論ぜられる。その限りでは、人間は、運命の偶然性を自らのうちに引き受けることのできる存在なのかもしれない。本書の編者の一人でもある植朗子は、本書とは別の著作で、自らの研究の動機は「理解しがたいもの」への関心であると語っている。そしてその「理解しがたいもの」の一つが、「自分たちの努力ではどうにもならない『運命』」（『はじまりが見える世界の神話』）であったという。

つまるところ、近代とはこの「運命」が見えづらくなり、「絶望」（キルケゴール）が深まった時代である。しかし、そこには近代の困難とともに、自由もまた存する。河合隼雄がジョーゼフ・キャンベルを引きながら述べるように、集団で共通の神話を持つ時代は終わり、我々は「各個人の責任と努力によって、自分の生き方における『神話的な様相』を見いだしていかねばならない」（『神話の心理学』）。それを不幸とするか幸いとするか、決めるのは我々である。いずれにせよ、本書がこの果てしない旅のよき道連れとなってくれることは、間違いがない。

『「神話」を近現代に問う』（2018 年）
植朗子・南郷晃子・清川祥恵編
勉誠出版　本体価格 2500 円

日々はひとつの響き　ヴァルザー＝クレー詩画集

若林恵・松鵜功記　訳著　　柿沼万里江　編

ヒンターエーダー=エムデ・フランツ（評）

現実には生じなかった二人の出逢いが百年後の今、ついに実現した。画家パウル･クレーと作家で詩人のローベルト・ヴァルザーである。

クレー（1879-1940）はドイツ表現主義サークル「青騎士」のメンバーであり、先進的デザインの教育機関バウハウスで教鞭を執った高名な画家として、日本でも数々の展覧会によって紹介されてきた。これに対し、ヴァルザー（1878-1956）の文学を日本語で読めるようになったのは、特に『ローベルト･ヴァルザー作品集』（鳥影社、2010-2015 年）の出版以来、近年のことである。

夏目漱石の『草枕』（1906）に、主人公の画家が思わず詩を書いてしまうくだりがある。そのとき彼は『ラオコオン』（1767）というレッシングの芸術論を思い出す。この芸術論によれば絵画は空間､詩作は時間に委ねられているのだが､『草枕』の画家は自分の詩は決して時間の流れに巻き込まれず､絵のような印象を呼び起こすのだと考える。

詩画集に戻ろう。ここではどのページでもしばらく見つめれば、絵が詩を語り、詩は絵になるに違いない。ヴァルザーもクレーも従来の絵画や詩の領域を超える不思議な感覚を呼び起こす。この二人はジャンルにも媒体メディアにも囚われず、自由な表現を求めているのである。

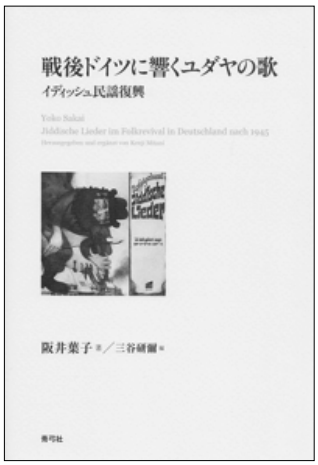
絵と詩の組み合わせは、一見するとぴったり整合しているように見える。例えば詩の『窓辺でⅡ』と絵の『外は色とりどりの人生』（p.38/39）、同タイトルの『キルケ』（p.88/89）など。しかし例えばクレーの『ポリフォニックにはめ込まれた白』とヴァルザーの『白い洗濯物』（p.46/47）が明白に示しているように、詩と絵が互いにパラフレーズすることはない。詩は庭で風に揺られる白い洗濯物を牧歌的に描いているが､太陽の光が夕暮れ、夜へ､「そよ吹く風」が徐々に「そよ吹く風もない」「ぼくの中」に変化していき、庭先の明るい動きが、やがて知らない間にやや気がかりな心の闇や静止へと展開する。一方、絵ではいくつかの透明な色彩の四角い面がずらされつつ重ねられ、中心部で全ての面が重なり合う。絵の具を混ぜ合わせると黒になるはずであるが、ここでは逆に白になり、光の効果を思わせる。しかも「多声的に」とタイトルにあるとおり、音響を通して物質を光へと導く共感覚的な手法が用いられている。

つまり、この絵画と詩の組合せは単純に並行しているのではなく、生き生きした対話を導く形になっている。クレー研究者の柿沼氏の解釈は示唆に富み、翻訳者の若林氏や松鵜氏は原作の詩に適切なコメントを加えている。絵画と詩、色と言葉の問答を楽しめるお勧めの詩画集である。

『日々はひとつの響き　ヴァルザー＝クレー詩画集』
（2018 年）
若林恵・松鵜功記訳著　柿沼万里江編
平凡社　本体価格 2400 円

戦後ドイツに響くユダヤの歌　イディッシュ民謡復興

阪井葉子　著　　三谷研爾　編



高岡智子（評）

イディッシュ語は「ジャルゴン（隠語）」や「ゲットー言語」とも言われるが、イディッシュ演劇、文学、音楽に見られるように離散したユダヤ人のアイデンティティの拠り所となった言語でもある。本書は、東方ユダヤ人のあいだで広まったイディッシュ民謡が、ホロコーストで多くのユダヤ人が犠牲となった「血塗られた国」ドイツで、なぜ戦後ふたたび歌われたのか、という問いからはじまる。著者の故阪井葉子氏は、イディッシュ民謡の「ことば」着目し、その問いに鋭く切り込む。フォークリバイバルをきかっけに復興したイディッシュ民謡が照射したのは、「過去への贖罪」と「伝統の再創造」の軌跡であった。著者は、歌い手であるユダヤ人とドイツ人が、戦後ドイツの歴史と政治に向き合い、葛藤するなかで、どのような歌を紡いだのかをあざやかに描き出したのだ。

本書には、イディッシュ民謡をレパートリーに持つ歌手がたくさん登場する。なかでも、1970年代の西ドイツのバンド、エスペとツプフガイゲンハンゼルのくだりが印象的だ。ナチス・ドイツへの道徳的贖罪が根底にあった60年代のフォークリバイバルは、70年代になると新しい社会運動へと変化する。そのなかで、ユダヤ系ではないドイツ人歌手がイディッシュ民謡に興味を示すようになる。それがエスペのメンバー、ガビ・ボリンガーであり、彼女は歌をきっかけにイディッシュ語を勉強し、ユダヤの伝統を学ぶ。イディッシュ民謡は、戦後ドイツの地でドイツ人の演奏家が介入することで、ドイツ文化におけるユダヤの記憶の伝承としての役割を果たしたのだ。

また、阪井氏がイディッシュ民謡に着眼するきっかけをつくったツプフガイゲンハンゼルは、バンド名をワンダーフォーゲルの公式歌集に負っているだけでなく、ともすればナチス・ドイツと結びつくワンダーフォーゲルとのつながりを意識していたという。彼らは「ナチスの歌」にはならなかったドイツの民謡を収集していた東ドイツの研究者ヴォルフガング・シュタイニッツとその弟子の民謡集をレパートリーに加えた。こうした活動は、東西ドイツの文化的交流によってドイツの民謡が再創造されるプロセスだったのである。

東ドイツにおけるフォークリバイバルの中心人物は、アムステルダムに生まれ、アウシュヴィッツ強制収容所からの生還者で、アンネ・フランクと移送列車で出会ったというユダヤ人の歌姫、リン・ヤルダティである。圧倒的な存在感を誇ったリンの記述には熱がこもる。そして、再統一ドイツでイディッシュ民謡を歌うのはだれか。それは東ドイツ出身の歌手だと著者は言う。阪井氏の早すぎる死により、残念ながらその理由が解き明かされることはない。このバトンを著者から受け取るのは私たちである。

『戦後ドイツに響くユダヤの歌　イディッシュ民謡復興』（2019年）
阪井葉子著　三谷研爾編
青弓社　本体価格2600円

ハイネを現代の視点から読む　―断章（フラグメント）・幻想破壊・食・女性

奈倉洋子　著

神谷裕子（評）

これまでの著者のハイネ研究を集大成し、6 つの面から彼の現代性を照らし出した労作である。視点を定め着実に焦点に迫るシャープな記述が印象に残る。独自のフラグメント（断章）、風刺詩の斬新さ、女神ディアーナ像の変遷などどれも興味深いが、ここでは 2 つの章について言及したい。

第Ⅴ章「ハイネにおける食」では彼の詩の末尾にみられる逆転について、「喜劇的効果をねらった文学的個性」とする先行解釈に加え、著者はそこに詩人にとっての食の重要性を読み取る。この指摘はさらに進み、いかに食が彼の文学の根幹をなしていたかが例証される。食の問題はハイネには「愛、真理、自由と同じ位の、否それ以上の重みをもっていた」のだと。

ハンス・ザックスも長編詩に食べ物を列挙したが、怠惰を戒める教訓で結ばれている。ごちそうが教訓で終われば、読者は禁欲の日常に戻されてしまう。だがハイネは教訓を革命にかえた。理想の生活が天国にあり、いくら食べても気分よく、病とも無縁の世界。著者の考察は、人が神と同じ神聖な存在で、神と同じ食を共有すべきだという彼の主張を引き出している。大食を大罪とみなすキリスト教へのアンチテーゼであり、「塵にすぎない」（創 3,19）とされた人間がここまで至ったことにわたしは感慨を覚えた。

肉体の解放をめざし、観念だけの救いを退けたハイネが、肉体の絶え間ない痛みとともに晩年の 8 年間をすごさねばならなかったのは何という皮肉だろう。肉は弱さ、はかなさ、無力も内包している。第Ⅵ章「ハイネと女性たち」では、作品に「ほとんど肉体的な女性ばかり」が描かれるその内実を、彼の多彩な女性との交流のなかでたどっている。

ハイネの妻は、年齢的にも知的精神的にも夫とかけ離れていた。情熱にまかせ、彼も上からリードできる可愛いフランス娘を選んだのである。彼女が重い十字架だったとしても彼は妻の無邪気さを愛し、自分亡き後のことも細やかに配慮した。激しい衝突の時を経て、ハイネが 2 人の関係を作り上げていった過程が鮮やかに浮かび上がる。彼が妻を支配しているように見えて、実はかなり「彼女に依存していた」という指摘は鋭い。情熱をこめて語った食でさえ苦痛になり、寝たきりで死に向かう日々に、彼女の明るさや笑い声は詩人を慰めたはずである。

「終りに」では、この本の完成直前にパートナーを亡くされたことが記されていた。ハイネに限らず誰もが、思いがけないさまざまな障害を乗り越えていかねばならないことが改めて胸にしみる。

奈倉先生、先生のご研究をこれからも続けてください。

『ハイネを現代の視点から読む ―断章・幻想破壊・食・女性』（2018 年）
奈倉洋子著
鳥影社　本体価格 2200 円